

「川越市幼児教育振興審議会」が開かれました

1 日時 令和7年7月25日（金） 10:00～12:00

2 場所 川越市教育委員会 東庁舎2階 教育委員会室

3 <出席委員>

山村 穂高、山本 正隆、イテル武田 抄子、岸 梨絵、寺橋 京子、
谷田 円、小松 悦子、大河原 早菜江、大西 麗衣子、山崎 真之

<事務局職員>

こども未来部保育課、川越市教育委員会学校教育部教育指導課

4 会議次第

(1) 開会

(2) 委嘱書交付

(3) あいさつ

(4) 事務局紹介

(5) 正副会長選出

(6) 議事

①令和6年度 幼児教育振興策事業報告

②令和7年度 幼児教育振興策事業計画（案）

③令和7年度 第48回幼保小連絡懇談会

(5) その他

(6) 閉会

5 審議内容及び意見の概要

(1) 令和6年度 幼児教育振興策事業報告

・全員異議なく原案通り承認

(2) 令和7年度 幼児教育振興策事業計画（案）

・実践事例集について質問がある。これは課題の設定をして園で持ち帰って研究を行うものか。

・実践事例集については、今年度のテーマである「興味・関心」について、それに基づいた実践を事例としてまとめるというものである。

・8月5日予定の「子どものよりよい成長を考える研修会」の内容は決定しているのか。過年度までの内容だと、グループ協議が自己紹介で終わってしまうのがもったいないと感じている。ビジョンをお聞かせ願いたい。

・講演を聞いてグループ協議を行うという流れになっている。参加者が主体的に学べる、意見交換ができるという場を設定している。ご意見いただいたことを参考に、意見交流の時間を設定している。

・全員異議なく原案通り承認

(3) 令和7年度 幼保小連絡懇談会

・せっかくの機会が2回もあるのに、という武田委員の視点に付け足して。例えば福原小なら、福原小に入学してくる近隣園との交流が持てるとよい。

・以前も提案させてもらったが、8月の研修会を2月につなげていけるとよい。（8月の

研修会の講師の方に、2月につなげるための相談等ができれば)

- ・協議のグループ決め等、検討する。
- ・主体的というが、初めて会う人同士だと難しい部分がある。グループ決めに関しては、小学校を核にする分け方や、積極的な園を中心におくやり方もある。
- ・いただいた意見をもとに検討する。
- ・市教委の立場だと、園と小学校との接続がわかりにくいのでは。園の方から参加するグループを選んでもらうのはどうか。
- ・中央地区としては、現状、接続する小学校が分散している。園の方から選ぶのはありがたいことだが、難しさもある。
- ・いただいた意見をもとに、検討する。
- ・幼保小連絡懇談会が「自分たちはこうしている」という交流で終わっている。園が知りたいのは「この時期、何をすればいいか」というところだと思う。そこからさらなる交流へ向けて、一步踏み出したい。
- ・時間の制限もあるが、もう一步踏み出せるとよい。
- ・参加者の拘束時間も考えなくてはならない。残れる人だけ残ればいいじゃないか、というのが私立の園の考え方。終了後も施設の開放をしていただき、自由な歓談の場を設定してもらえるとありがたい。
- ・資料3の事業計画について、対象が誰なのかというのがよくわからない。2月になってから「交流を」と言われても、いきなりは難しい。8月の研修は悉皆か。
- ・事業計画について、対象は市内の幼稚園・保育園・小学校すべてである。当番校はいわゆる「旗振り」をする。それぞれの班で懇談会の日程等を決めていただき、それぞれの班で懇談会を行っている。
- ・2月に幼保小連絡懇談会があるなら、第2回幼保小振興審議会はこの時期ではないのいいのではないか。
- ・10月は幼保小連絡懇談会への準備会といった形になる。本来なら幼保小振興審議会は3回あるべきである。振り返りがない。
- ・幼保小連絡懇談会の後に振り返りとして幼保小振興審議会がもう1回あるとよい。
- ・資料8について、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」とある。だが、これは意味のないものになっている。例えばどういうことかということを示すべきである。これでは抽象的すぎる。
- ・事例集のフォーマットについても、今後委員の方に意見をいただきたい。
- ・「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は小学校向けに作っている。
- ・スタートカリキュラムについて、学校間の差を感じる。だからこそ、具体的にそれが何を意味するのかが分からないと、認識にずれが生じる。
- ・学校で生活科の主任がいる。夏に研修を行うことになっている。今年のテーマは「スタートカリキュラム」である。各校のスタートカリキュラムを持ち寄り、他校の例を通して練り直すという研修になっている。今後も生活科部会を活用すると良いのでは。この場に校長会の生活科の担当がくるという形もある。(今年はたまたま大河原委員が生活科担当)生活科＝スタートカリキュラムではないという点に留意は必要だが、この場にいる委員が生活科の研修会に参加する案もある。
- ・小学校の先生方が研修で扱っているというのを知ることができてよかった。こちらとしても、小学校の実態があまりわからない。どれぐらいスタートカリキュラムを知っているのか。私立幼稚園と公立小学校との間の壁を感じる。互いに情報開示をしていく必要がある。
- ・いろいろな機会を通して架け橋期プログラムの周知を行っていく。
- ・私立幼稚園協会をぜひ活用してほしい
- ・私立幼稚園協会で振興会の委員の先生方にPRをしていただければ。
- ・文部科学省でも架け橋期プログラムが大切であるとしている。教育委員会でもそれを

- もとに周知していく。私立幼稚園協会と連携をして、広めていきたい。
- ・ スタートカリキュラムは何校が実践しているのか。
 - ・ 8月5日の研修の振り返りにて、実態の把握をする予定である。
 - ・ 架け橋期プログラムのアンケートが来たことがあるが、あれはどこのものか。
 - ・ 県教育委員会発出のものである。
 - ・ 進捗状況を把握し、今後、共有させていただきたい。
 - ・ 幼稚園・保育園について、保護者はさまざまなカリキュラムを「選んでいる」実態がある。ではカリキュラムが「広がる」とは何か。好事例集の提示があるとよい。
 - ・ 好事例集はほぼ「公立園、公立小」の連携ばかりである。私立幼稚園にはそこに課題がある。
 - ・ 次期学習指導要領はガイドライン的になると思われる。好事例集も「縛るもの」ではなく「ガイドライン」的なものになるといいのではないか。
 - ・ 福原小・福原幼稚園 新宿小・レイモンド保育園の連携の例がある。(私立幼稚園との連携例)
 - ・ 実践例を集めて「じゃあこれをやりましょう」となるためにはどうすればよいか。
 - ・ まず架け橋期プログラムを校長が知ること、使うことが必要である。
 - ・ 今あるものを知ってもらう。そのために必要なことは何か。
 - ・ 「子どものよりよい成長を考える研修会」に管理職が出席するという案もある。
 - ・ 周知の機会は他にもあるので、まず知ってもらうことからであると考え。最終的には10割の実施を目指している。そのために期間を設ける。
 - ・ 少しずつでも着実に進めることを心掛けていただきたい。その間に出てくる案もある。
 - ・ 「やりなさい」と言われても必要感がないとやらない。近隣の保育園から「ぜひ様子を見に来てほしい」と言われ、低学年の教員が見学に行った。それを通して教員の中に必要感が生まれた。
 - ・ 公開日を再び設けるという案もある。連絡懇談会は現状会場が小学校になっているが、2月の小学生を見にいても架け橋期プログラムの目的に沿わない。かつて、幼稚園・保育園で公開日を設けたことがある。あのときは、小学校側から職員があまり来なかったが、現状を考えるともう一度設定してもよいのでは。
 - ・ 新1年生の担任が決まるのはいつか。
 - ・ 4月当初である。
 - ・ 見学が大変というなら、デジタルツールを使うのはどうか。
 - ・ 静止画は大丈夫かもしれないが、動画は難しいと思う。研究の目的で提供の許可がもらえれば可能ではないかと考える。
 - ・ 編集で顔がわからない形にすることもできる。何ができて何ができないというのがわかることが大切なのは。
 - ・ 撮影に関しては、視点をちゃんと与えないとずれてしまう。例えば幼稚園に求めることとして「45分間座れるようにしてください、自分の名前を書けるようにしてください」と教員はつい言うってしまうが、それは幼児教育の視点ではない。保護者説明会の資料を持ち寄って意見をもらうという形もある。逆に、あさがおの栽培など、小学校で扱う内容を幼稚園でやっていることもある。具体的な何かがないと「こんなことが起こるのでは」につながらない。
 - ・ スタートカリキュラムは小学校に安心して通えることが土台にある。教科の連続性と似ているが、連続性を意識して広げていけると、子供たちの安心感につながる。これは当たり前のことのように思えるが、実際はどうか。
 - ・ 実際のところ、スタートカリキュラムを実施している学校では泣いている子供は1人もいない。子供が安心して学校に通う様子を見ると、スタートカリキュラムの意義が伝わるのでは。
 - ・ 指定校に校長が赴いて見学すると、よさが伝わる。

- ・ 指定校は決まっているのか。
- ・ スタートカリキュラムに取り組んでいるところを中心においている。
- ・ スタートカリキュラムの良さを広げていけるよう、協力していく。